

重症熱性血小板減少症候群について

最近になってその存在が知られるようになった、ダニ媒介性の新しい感染症「重症熱性血小板減少症候群」の患者が、今般、日本国内において報告されました。ここでは、重症熱性血小板減少症候群について、海外での情報等を参考に、現在までに分かっていることについて整理しました。

1 疾病名

重症熱性血小板減少症候群

(Severe fever with thrombocytopenia syndrome: SFTS)

2 病原体

SFTS ウイルス（ブニヤウイルス科フレボウイルス属）

3 発生状況

- ・ 2009 年 3 月～7 月中旬にかけて、中国中央部（湖北省及び河南省の山岳地域）で、原因不明の疾患が集団発生したことで本感染症の存在が明らかとなり、2011 年に原因ウイルスである SFTS ウイルスが確認された（現在は 7 省で報告あり）。発生地域では、フタトゲチマダニ等のマダニが SFTS ウイルスを保有しており、このウイルスに感染した哺乳動物も見つかっている（動物の発症は確認されていない）。
- ・ 2009 年、米国ミズーリ州において SFTS 様疾患の症状を示す患者が 2 名発生し、患者検体から SFTS ウイルスと近縁なウイルスが検出された。
- ・ 過去に日本を含む世界の他の地域での発生報告はない。

4 感染経路

- ・ フタトゲチマダニ等のマダニによる咬傷（ただし、ダニによる咬傷痕が確認できない場合も多い）
- ・ 感染患者の血液・体液との接触感染も報告されている。

5 症状

- ・ 発熱、倦怠感、食欲低下、消化器症状、リンパ節腫脹、出血症状
- ・ 潜伏期間は 6 日～2 週間
- ・ 致死率は約 10-30%（中国において、2009 年当初は報告例が少なく致死率 30 数%であったが、その後調査が進み、10 数%となっている）

6 検査所見

血小板減少（10 万/mm³ 未満）、白血球減少、血清電解質異常（低 Na 血症、低 Ca 血症）、血清酵素異常（AST、ALT、LDH、CK 上昇）、尿検査異常（タンパク尿、血尿）

7 病原診断

- ・ 血液等のサンプルからのウイルスの分離・同定及び RT-PCR によるウイルス遺伝子の検出
- ・ 急性期及び回復期におけるウイルスに対する血清中 IgG 抗体価、中和抗体価の有意な上昇の確認、又は、IgM 抗体の検出
(現在、国立感染症研究所ウイルス第一部で実施可能)

8 治療

- ・ 特異的な治療法はなく、対症療法が主体となる。
- ・ 有効な抗ウイルス薬はない（中国では、リバビリンが使用されているが効果は確認されていない）。

9 予防法

- ・ 野外でダニに咬まれないようにする。
- ・ 感染者の血液、体液、排泄物との直接接触を避ける。
- ・ ワクチンはない。